

重点を置く農家も多いのである。

本地域の土地利用は、現在、まだ確立されてはいないが、すべて傾斜地である本丘陵の他の地域に比し、経路雑多で、換金作物も多い。それは、本地域の自然条件に加えて、早くから開けた交通、大都市、この地方の都市と直結できる交通位置などによるものが大きい。

本地域は、いわゆる“山間の寒村”ではない。それどころか、生活すべてが、大都市、地方都市と密接に結ばれているのである。それだけに、農業人口は減る一方であろうし、農業の合理化のテンポが、それに追いつかないとしたら、どこかで、農業の合理化に一大飛躍が行なわれぬ限り、本地域の農業土地利用は、放棄されるであろう。

犀川丘陵南部の地形と土地利用

上條 さやか

犀川丘陵は長野県北部の南端に位置し、千曲川と犀川、土尻川に囲まれている丘陵性山地一帯である。Fossa Magna 西部に位置して、軟弱なオ三紀中新統の別所、青木、小田切層を主とする、山崩れ、地じりの多い、かつ起伏が非常に複雑で、細かくみれば複雑な急傾斜面の組み合わせつつた炭礫世侵蝕面よりなる地域である。部分的に洪積段丘面、それに附随した沖積面が犀川に沿って分部している。

少しでも軟らかい地形部は悉く耕され、犀川沿いの低地は勿論、尾根、谷間、山腹まで処々に塊村状集落が散在する。地じりによる緩斜面は生活に重要な意味をもっているのである。調査地域として、このような所に位置する生坂村をとり上げた。

本地域は県内でも後進山村といわれ、自然的にも社会的にも諸制約が多く他地域の農村の進歩から取り残された村である。どのような意味で後進的であり、どの様な制約が重なっているか、何らかの解決の糸口が引き出すことができればと、本村の農業の立地及び現状把握を試みた。勉強不足、実力のなさから現状把握が手一杯で、後進性の由来する地域性の分析は非常に不十分に終ってしまった。

本地域は70% 十次主業農家で、最近兼業が増加してはいるが殆ど入夫日雇の不安定な農外所得の増大である。この様に農業依存度は高いが、如何なる形で農業が営まれているだろうか。

前述の如く耕地としては急傾斜地が圧倒的で、大部分が傾斜15°以上、中

でも25°以上が半分を占めている。その上、我が国でも降水量の少ない地域に位置し、透水性の悪い頁岩泥岩を含む才三紀層であり、雨はその急斜面を流れるので激しいがり侵蝕がおこされ、結果的には、耕地は熟畑化されず、荒廃し、夏は乾ばつさえ起きている。地形は細かく複雑であり日陰耕地も非常に多い。本地域を考える時、忘れられないのは、地入り、山崩れによる地形が多く、耕地の多くはそれにより立地したものであることである。本丘陵も北部は大規模な地入りが多く、複雑に水田化されているが、本地域のように丘陵南部では地入りも小規模で従って急傾斜であり、北部の如き豊かな滞水層を欠き、地入り跡の水田化は全く不可能である。このように、農業に不利な自然條件ばかり備えているから、土地利用の仕方もある程度工夫はこらされておられ、作物は大小麦、大小豆、桑が主体だが、作付けられる場所にその工夫が現れている。即ち、麦畑は日向斜面が選ばれ、日向であれば相当な急傾斜地まで畑地として開かれている。麦畑の夏作は豆類になるのでこの時乾ばつへの被害がおこる。35°以上の如き急傾斜地では夏作のみで冬作の作付をしない。年1作の畑が増加する。夏季1作であれば太陽高度の高い期間であるから日向日陰の区別はあまりなされない。この様な畑は運搬の困難から殆んど無肥料で作られることもあり、勿論、手入れはされず、播付時から粗放的である。養蚕は中心的現金収入源であるから、日向の、比較的緩斜面で、家屋からも近く、施肥や採取に都合のよい条件の良い場所が選ばれる。一般に周囲より肥沃な地入り跡も、普通畑より桑園にされることが多い。樹木作物故土壌侵蝕防止もかねて、もちろん、急傾斜地にも植えられている。

この様に工夫はなされても、作業の困難さからくる粗放経営、その上経営規模は零細で土地生産性は低く、食困との悪循環からは抜け出せないのが現状である。従って家畜や農業機械の導入も遅れており、合理経営にふみきり果樹や酪農を加えるのもなかなか進まず、低収入、周囲の前進から取り残された最低生活に甘んじている。自然条件及び、それによる交通輸送条件の劣悪もあるが、資本の欠如に還元される面も大である。急傾斜地という条件から、粗放的であっても他より単位面積に投入する労効力は多くなければならず、このことは一農家当りの男子労効力が他に比して多いことから伺える。従って農業を離れられない人口が多くなり、その人口は不安定かつ不合理な自村内の災害復旧の土木工事の人夫として現金収入を得ているのである。又他の一般的山村と異り、山林は雑木林と禿山であり、農業は林業との結びつきを欠いている。

これらを省みると、農村は至貧発展に従って至貧形態の分化が進むのが常

であり、本村も江戸期から煙草栽培、次いで養蚕と商品作物が導入され、雑穀、麦豆との複合がなされ不利な自然を克服したかにみえたがその発展は養蚕までで、絹ののび縮みと共に本地域は停滞性を示し始めたといえる。即ち養蚕一部門に依存度大となりすぎ、新時代に即応できる周囲の経営部門分化から取り残された地域である。この場合自然の不利は大阻害因子であり、近隣、高冷地などの特殊な経営をのぞき、一般農村にもその傾向はあるが、本地域は特に強く現れている。その矛盾を農業経営内部からの解決が遅れているのも問題である。経営規模の委細性、経営の粗放性と共に、停滞性もしくは後進性が非常に顕著であることは以上より述べることができる。

東関東の後進農業地域の地理的考察

— 茨城県東茨城郡旧石崎村を中心として —

河 口 登 志 子

卒業論文を書くにあたっての、初期の目的は日本の農業を、もつとも本来の姿で把握したいということであつた。調査を進めるうちに、地理の方面から農業を見るには、現在ある農業の性格を知り、かつ、その地域性、つまり自然、社会、経営等の諸条件の中に、その性格を生み出す原因を探つてゆくことが中心となるべきではないかと考えはじめた。

調査地域として選んだ茨城県東茨城郡旧石崎村は、典型的な東関東の後進農業地域であり、主としてこの後進性（つまり、農業本来の性格である自給自足的、閉鎖的性格からの脱出が十分でないこと）を生み出し、かつ持続せしめているものは何かについて考察を進めた。

全体は4章よりなり、才1章概説および才2章地形と土地利用は、才3章農業および才4章総括で示した、地域の農業の性格を知るための方法として取り扱った。

調査地域は関東平野の東北部、茨城県東茨城郡茨城町に属し、半鹹湖である酒沼北岸に位置する。地形は酒沼川および酒沼の縁辺部に沿う沖積低地とその北部に急崖を成して接する洪積台地に大別される。沖積地は標高0~7mでさきわめて低平であり、酒沼の上流および下流部に分布するデルタと、その先端の干拓地の部分を除いて非常に発達状況が悪い。台地面は標高30m前後の平坦な地形で水に乏しい。台地構成物質は洪積期の成陸性堆積物質である砂礫層の見和層（成田層に対比される）であり、その上を2~3mの層厚を持つ関東ローム層が覆っている。特殊な気候条件としては夏期の降水量の少ないことがあげられ、夏期作物の作種決定に大きな影響を与えている。